日本の義務教育課程における平和教育を見つめ直す ～海外の事例から日本の平和教育を考える～ 石川ゼミ

0. リサーチクエスチョン（RQ）

- 日本における現在の平和教育、特に義務教育課程における プ ロ セスは多くの問題点及び課題（カ リキュラム上のコン テンツの偏りや伝え方等）を抱えてお り、失敗しているの ではないだろうか？
- 平和教育が 比較的効果的に機能 していると考えられる他国と比較した とき、日本はそのア ドバンテージをどう自らのプロセスに 落とし込めば、効果 的なプロセスへと変革させられるのか？

1.日本の平和教育

＊悲惨な戦争体験や被爆体験を継承する

- ✓ 核兵器の脅威に着目させ、戦争反対、平和を希求する態度を育む
- ✓ 戦争を否定する題材を用いて反戦的な平和意識を形成する

2.日本の平和教育： 課題・問題

- 心情・情緒に依存した平和教育
- 平和教育の中心： 戦争学習・教育＝＞ 偏り
- 特定の認識・価値観・生き方に囚われがち ＝＞ 排他的

受動的な注入教育
＋ 能動的な考察

3. 海外の事例（1）： ドイツ

- 知識伝達 ＜ *思考プロセスの体得*
- 教科書＝ *様々ある材料の1つ* ＜＝~~それしか真実はないそれだけおぼえればいい~~

＝＞ 物事を無批判に受け入れず、自分の頭で考えられる人材の育成を目的
＜＝ ナチスの台頭を許した過去の反省

＊学習の順序

教科書の内容を正確に把握 → その内容を自分なりにまとめて授業で人に伝える

4. 海外の事例（2）： イギリス

- ミクロ・レベルにおける個々の人間関係・対社会関係の良好状態＝ 集団・社会全体の“平和”
  ＝＞ *消極的平和だけでなく積極的平和を学ばせる*
- 教科書-＞ 多くの人の意見を掲載＝＞ *歴史を客観視*
- 参加型授業： 思考させる設問が多い （Eg. 連合軍はなぜ原爆を投下したか？）
  ＝＞ *話し合い＋レポート執筆を多用*
- カリキュラム ＜＝＞ *自由裁量的な授業*

5. 日本の平和教育と海外の平和教育の相違

- ✓ 生徒に自ら考え、自分なりの考えを持たせることを重視
- ✓ 考えさせるだけでなく、それを表現することを重視
- ✓ カリキュラムの柔軟性
- ✓ 教科書に“沿った”プロセスではなく、教科書を“媒介とした”プロセス

4. どうすれば日本の平和教育は変われるか？

- ◆ より多角的な視点を取り入れる ＝＞ Eg.）被害者としてだけでなく、加害者としての歴史も重要視
- ◆ 身近なコミュニティレベルでの平和について考える時間も設ける＝＞ Eg.）教室内の平和
- ◆ ディスカッションの時間を増やす＝＞ 能動的に学ぶ姿勢を養う
- ◆ 先生≠ 学びを“与える”存在＝＞ 学びを“サポートする”存在への転換

参考文献
池野 範男(2009)「学校における平和教育」『Social Studies』48(1), pp111-117
石渡延男、越田稜（2002）.『世界の歴史教科書ー11か国の比較研究』， 明石書店,p184-208
中村敬子, & ナカムラケイコ. (1994). < 研究論文> イギリスにおける ‘Peace Education’の理念と実践に関する研究: マンチェスター市教育委員会のガイドライン (1988) を事例として (篠原昭雄教授退官記念号). *筑波社会科研究*, *13*, 47-57.